

## 随想

## 潜在能力の不思議

## 痛みを反応する身体

加藤 宏光

先日、研究所でひどく転んだ。雪が融け、その夜に零下六度Cでカチカチに凍りついた駐車場、しかも車の陰の暗闇での出来事であった。それをまとったく「想定外」で、防御の姿勢も取れないままたたか胸を強打し、息もつけない激しい痛みにしばらく起き上がることもできなかった。

それでも、そのときは単に強い打ち身をした程度にしか思っていないかった。その夜には痛みを感じるものの、二三日すれば治ると思っていたため、とくに体をかばうこともなかった。しかし三日過ぎたころ、体幹を捻るような動作をしたはずみに左の第四・五肋骨の外側と左

脇下奥に、覚えのある激しい痛みを感じた。その痛みは、著者が若いころ空手の合宿に参加した時に、組み手練習で当時の三重大学空手部キャプテンを回転蹴りで追いつめた際に、後ろ蹴りで後三枚と呼ばれる肋骨部を蹴られた時によく似ていたのである。その時にも、事故の当日よりも二三日後に、ある種の運動で肋骨に入ったヒビ部がよじれたり、ヒビ部が大きく口を開くために突如激痛が走るのである。

寝返りを打つ際に感じる痛みが眠りを妨げるため、まんじりともできない。また、咳やクシャミをすると言葉にできないほどの激痛でしばらくは息もつけない。

この痛みは、普通に体を維持している際には発生せず、耐えられる鈍痛を感じるにとどまるため、接する人にはそれとはわからないらしい。

肋骨にヒビが入った場合には痛みが治まるのに三週間あまりかかることは経験済みである。かなりの長期間、クシャミや咳をするたびに走るこういった拷問のような痛みに耐えるのは、思ったよりもきついことに、こうなってみて改めて気付いた。

実は著者は二〇年ほど前にスギ花粉症を発症し、それ以来徐々に体が反応するアレルゲンの種類が増え、今ではあらゆる花粉は言うに及ばず、ハウスダストや猫アレルギーあるいは寒冷気

等々さまざまな物質に対して反応し、ちょっとした折にクシャミが出る。そして出始めると連続して一〇回以上続いてしまうこともまれではない。また、過敏症の常でせきも出やすい。

最初の三日間は、横伏しても骨がうずきまんじりともできないのに加えて、朝の冷たい空気を吸えばクシャミが出て、その後しばらくは腰をかがめて唸ることになる。そのクシャミが二度三度続けば地獄の沙汰にも例えられる。

しかし、四、五日目には、クシャミも五回に二、三回出るのを堪えられるようになったのである。せきについても同様で、一週間目には一日に多くて二、

三度のクシャミで済むようになり、その後は一日中クシャミもせきも出ないことが続くようになった。

太平洋戦争中、米兵から逃れるために幼児を連れて、洞窟に隠れた市民が、子どものクシャミやせきで発見されないように、その鼻と口を手で押さえ、ついには死に至らしめた、といった逸話を聞いたことがある。それほどに堪えられない本能的動作であろう。それが、先に述べた痛みを耐えるために体が自然に変化するのだろうか？ 実際

この一週間ほどの間、クシャミ、せき共にほとんど出ないで済んでいる。

このように耐えられないほどの「痛み」がどうして発生するのかを考えてみた。

思うに、先に述べたように肋骨等の骨にヒビが入った段階では、痛みはそれほどでもない。しかし、それと気付かず体軀をねじる等の運動をすると、ヒビが大きく開く等骨折に近い状態となる。ご存じのように、肋骨等の骨はギプスで固定することはできない。早く治癒させるた

めには、動かないことが最も重要であるが物理的に固定することはできないため、患部を動かさないようにする以外には方法がないのである。クシャミやせきは嫌でも患部を動かすことになる。激しい痛みを避けるために、自然にクシャミやせきを出さないように体が反応しているであろう。

体の治癒を求めて体自身が自動的に反応する（と著者は信じている）とは、何と素晴らしい潜在能力であろうか！

そして、三週間で過ぎた今、

痛みは薄らいできた。せきやクシャミが出ても唸るほどの痛みを感じない。しかしその一方で、あれほど容易に堪えられたせき、クシャミは環境が変わると以前と同様に出てしまうのである。先の経験が永続的で、長年悩まされた花粉症から解放されるか？ という淡い期待は裏切られたのである。

なるほどそうそううまくいくものではないな。